十一、虎屋と水戸浪士

虎屋は、江戸時代の末期のころ旧東海道沿いの南品川宿にあった旅籠屋でした。主人の虎屋定兵衛は、もと水戸（茨城県）で旅籠屋を営み、大変評判がよく、水戸の殿様徳川斉昭から短刀を拝領し、名字帯刀まで許されていたそうです。

定兵衛が江戸へ出て、南品川宿で虎屋を開業したのは、安政二年（一八五五）のことです。江戸に出て来た理由は明らかではありませんが、あるいは、安政二年の大地震によって、水戸の旅籠屋が倒壊したためかも知れません。

品川宿は、江戸時代に、東海道第一の宿として設けられました。日本橋から二里（約八キロメートル）の距離にあり、芝高輪町と大井村の間の南北約二キロメートルの海辺の宿場町です。宿場には、幕府の役人や大名のために、荷物の運搬用の馬を差し出したり、人や荷物を次の宿場まで運ぶという役目がありました。また、大名が参勤交代の時に泊まる本陣や一般の旅行者のための旅籠屋もたくさんありました。

ある日、虎屋に水戸の徳川斉昭の家臣、武藤武右衛門が訪ねてきました。武右衛門は、定兵衛が水戸にいたころからの知り合いで、水戸の藩士八人をかくまってほしいとたのみに来たのです。八人の藩士とは、山口辰之助、稲田重蔵、広岡子之次郎、鯉渕要人、斉藤監物、佐野竹之助、蓮田市五郎、黒沢忠三郎です。定兵衛は、大変迷いましたが、古くからの知り合いのたのみでもあり、引き受けることにしました。

やがて、万延元年（一八六〇）三月三日、一行八人は、早朝に虎屋を出発して、芝の愛宕山（港区）で関鉄之助をはじめとする他の十人の仲間と合流して、桜田門へと向かいました。一方上巳の節句（三月最初の巳の日の桃の節句）の祝いに出るため、外桜田（千代田区永田町）の屋敷を出た、大老井伊直弼の駕籠は、約五十人の家来に守られながら、江戸城に向かって桜田門の近くまで進んで来ました。昨夜から降り続いている雪で、あたり一面が真っ白になっています。

突然一発の銃声が鳴りひびきました。ごう音を合図に、十八人の武士が一斉に刀を抜いて大老井伊直弼の行列に切りかかりました。関鉄之助に率いられた水戸浪士の一団です。

雪の中での激しい戦いで、水戸浪士たちは、大老の首を討ち取りました。しかし、敵味方とも多くの死傷者を出し、雪を真っ赤に染めました。

安政五年（一八五八）、江戸幕府の政治に反対する人びとが、次つぎに捕らえられ、死刑にされるという、安政の大獄がありました。この時に幕府で中心となっていた大老井伊直弼の暗殺計画が水戸藩や薩摩藩の武士たちによって進められていたのです。大老井伊直弼の暗殺は、桜田門外の変と呼ばれ、歴史に残る一大事件です。

その後虎屋は、奉公していた女の話しから、水戸浪士をかくまった罪で捕らえられ、店は取りつぶされ、定兵衛は牢屋で死に、また、家族は江戸を追われ、京都に身を隠したそうです。

なお、この事件の水戸浪士たちは、三月二日に北品川にあった相模屋に泊まって、十八人がそろって、最後の会合をして、三日の朝に桜田門に向かったという説もあります